

優秀賞

後ろ姿を見つめながら

北海道 村上沙由里

大きなランドセルを背負い、学校へ向かう小さな娘の後ろ姿を毎朝見送る。我が家から学校までは少々遠い。途中、車通りの多いコンビニや横断歩道が数ヶ所あり、危なっかしい橋も渡らなければならず、学校に着くまでいくつもの心配があるのだ。でも大丈夫。今の時代、子ども用GPSというものがあり、それを娘に持たせている。そのおかげで、娘が「今どこを歩いているのか」をスマホで逐一確認できる。学校に到着したという通知を見て一安心し、今日も一日頑張れと、心の中で応援してスマホを閉じることが私の朝の日課だ。前に一度、GPSを確認すると、教えた通学路ではない道を歩いて登校している時があった。案の定、慣れない道だったためか道中で転んだようで、タイツの膝部分を血でにじませて帰ってきた。わけを聞くと、同じクラスの友達がその道を歩いていたようで、自分も歩いてみたくなったとのことだった。せっかく、一番安全で近い道を教えたのに。それでも娘は自分の意思で、別の道を歩いたのだ。

この先、娘はもつと成長していく。そして、私の知らない世界を歩いていくのだろう。

「今どこを歩いているのか」GPSでさえ、もう追うことができない遠い世界。様々な人と出会い、様々な経験の中で、多くのことを学んでいくのだろう。時にまた、転んで、傷つくこともあるのかもしれない。私が知ることのない、遠い世界の中で。

大きなランドセルを背負い、小さくなっていく娘の後ろ姿を見つめながら、私はいつも強く願う。「忘れないでほしい。あなたがこの先どこにいても、いつでも私がここでみまもっていることを。あなたが笑って幸せに歩いているのなら、そこがどんな道でも構わない。けれどももしも、転んで傷ついて、どうしようもなく苦しくなった時には、思い出してほしい。私はいつでもここで、あなたを待っていることを。」